

平成三十年度

群馬県立女子大学 文学部 国文学科

転入学・編入学試験

専門科目 試験問題

試験時間

11時00分～12時30分

## 問題一

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

その所に冬のほどは侍りて、春になりしかば、<sup>①</sup>上野国へ越え侍りしに、<sup>②</sup>思はざるに、一夜の宿を貸す人あり。三月の初めのほどなりしに、軒端の梅のやうやう散り過ぎたる木の間に霞める月の影も雅びかなる心地して、所のさまも、松の柱、竹編める垣しわたして、<sup>③</sup>田舎びたる、さる方に住みなしたるもよしありて見えしに、家主出であひて、心あるさまに旅の愁へをとぶらひつつ、世を厭ひそめける心ざしのほどなど、細かに問ひ聞きて、「われも常なき世のありさまを思ひ知らぬにはあらねども、背かれぬ身のほだしのみ多くてかかづらひ侍るほどに、<sup>④</sup>あらましのみにて今日まで過ぐし侍りつるに、今夜の物語になん、捨てかねける心の怠りも今更驚かれて」など言ひて、「しばしはここに留まりて、道の疲れをも休めよ」と語らひしかど、末に急ぐことありしほどに、秋の頃必ず立ち帰るべき由、契りおきて出でぬ。

その秋八月ばかりに、<sup>⑤</sup>かの行方もおぼつかなくて、わざと立ち寄りて訪ひ侍りしかば、その人は亡くなりて、今日七日の法事行ふ由答へしに、<sup>⑥</sup>あへなさも言ふ限りなき心地して、なか今少し急ぎて訪ねざりけん、さしもねんごろに頼めしに、偽りのある世ながらも、<sup>⑦</sup>いかにそら頼めと思はれけん、心憂くぞ侍りし。さて終のありさまなど尋ね聞きしかば、<sup>⑧</sup>「今はの時までも申し出でしものを」とて、<sup>⑨</sup>跡の人々泣きあへり。<sup>⑩</sup>有侍の身、初めて驚くべきにはあらねども、無常迅速なるほど、今更思ひ知られ侍りし。

(『都のつと』による)

注1 跡の人々……遺族。

注2 有侍の身……はかない身。

問一 二重傍線部「思ひ知らぬにはあらねども」を解答用紙に書き写した上で、(例)にならって品詞分解しなさい。

(例)

名詞	助詞	動詞・連用形	補助動詞・連用形	助動詞・終止形・過去
書	を	読み	侍り	けり

問二 波線部①「上野国」は現在の何県か、漢字で答えなさい。

問三 波線部②「思はざるに」、③「よしありて」、④「あらまし」、⑤「あへなき」を現代語訳しなさい。

問四 傍線部ア「今更驚かれて」とは、どのようなことをどうしたというのか、具体的に説明しなさい。

問五 傍線部イ「かの行方もおぼつかなくて」、傍線部エ「今はの時までも申し出でしものを」を、わかりやすく言葉を補って、現代語訳しなさい。

問六 傍線部ウ「いかにそら頼めと思はれけん」とあるが、どのようなことをどのように思ったろうというのか、わかりやすく説明しなさい。

問七 傍線部オ「今更思ひ知られ侍りし」とありますが、どのようなことによって何を思い知ったというのか、説明しなさい。

## 問題二

次の文章A、Bを読んで後の問いに答えなさい。

A 蓮華寺では下宿を兼ねた。瀬川丑松が急にやどがへ転宿を思ひ立つて、借りることにした部屋といふのは、其蔵裏つゞきにある二階の角のところ。寺は信州しもみのちごほり下水内郡飯山町二十何ヶ寺の一つ、真宗に附属する古刹で、丁度其二階の窓に倚より凭かかつて眺めると、銀杏の大木をへだ経てて飯山の町の一部分も見える。

B 木曾路はすべて山の中である。あるところはそは岨づたひに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてゐた。

問一 A、B共に同一の作者が執筆した作品の冒頭部である。作者名を記しなさい。

問二 Aの作品名を記し、その文学史的意義について簡潔に説明しなさい。

問三 B『夜明け前』は、幕末維新期の馬籠宿を舞台に、主人公青山半蔵の半生を描いた長編である。

このような小説ジャンルを何と呼ぶか。

問四 作者は詩ジャンルにおいても足跡を残した。詩集名を一つあげ、その文学史的意義を簡潔に記しなさい。

### 問題三

次の各項目について具体例をあげて説明しなさい。

問一 方言

問二 万葉仮名

問三 下一段活用

問四 接辞

問五 ニーズ分析

## 問題四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

楚人有<sup>1</sup>二涉<sup>レ</sup>江者<sup>一</sup>、其劍自<sup>1</sup>二舟中<sup>一</sup>墜<sup>ニ</sup>於水<sup>一</sup>、遽契<sup>ニ</sup>其舟<sup>一</sup>曰、「是吾劍之所<sup>2</sup>二從<sup>レ</sup>墜<sup>一</sup>。」舟止、從<sup>ニ</sup>其所<sup>レ</sup>契者<sup>一</sup>入<sup>レ</sup>水求<sup>レ</sup>之。舟已行矣、而劍不<sup>レ</sup>行。求<sup>レ</sup>劍若<sup>レ</sup>此、不<sup>3</sup>二亦惑<sup>一</sup>乎。以<sup>ニ</sup>此故法<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>其國<sup>一</sup>与<sup>レ</sup>此同<sup>4</sup>。時已徙矣、而法不<sup>レ</sup>徙、以<sup>レ</sup>此為<sup>レ</sup>治、豈不<sup>レ</sup>難哉。

『呂氏春秋』卷十五「察今」

(注)「楚」…戦国時代の国名。「遽」…慌てて、うろたえて。訓は「にはか」。「契」…きざむ。印を

つける。「徙」…うつる。

問一 傍線部1を書き下し文に改めなさい。(歴史的仮名遣い)

問二 傍線部2を正確に現代語訳しなさい。

問三 傍線部3を、ひらがなのみの書き下し文に改めなさい(歴史的仮名遣い)。

問四 傍線部4「此」の指す内容を簡潔に答えなさい。

問五 本文とほぼ同じ趣旨の四字熟語を次のA～Eの選択肢から選び、その記号を記しなさい。

A 金科玉条    B 守株待兔    C 破釜沈舟    D 移花接木    E 本末転倒